

第10回エデュカーレ in たかはし

食でつなげる人・未来
～自然、文化、環境～

報 告 書

開催日時：平成28年12月17日(日) 13時00分～17時00分

会 場：高梁まち・ひと・くらし市民交流センター（ポルカ2階）

主 催：エデュカーレ in たかはし実行委員会

協 力：吉備国際大学社会科学部 井勝研究室

1. はじめに

エデュカーレ in たかはしは、私たち学生が地域の皆様と関わらせていただくことにより、学生が実践的な課題解決能力を身に付け、社会に貢献できる人材となることを目的として開催させて頂くものです。

第10回エデュカーレ in たかはしは、「食育」を題材として開催することにしました。生きていく上で必要不可欠な「食」は、今では世界中から輸出され、加工品があふれ、「飽食」と言われている状態です。日本の食料自給率は先進国の中で最低で、日常生活と農業・漁業・林業の現場が遠く隔たってしまいました。人のつながり、自然のつながりが見えにくくなっている現状です。

感謝するところを身近に感じる事が出来ない子どもたちに何を伝えなければならないのか、参加者が理解をし、食育の必要性について参加者同士で意見交換をしました。

2. 実施内容（プログラム）

- 1) オープニング
 - ①実行委員長あいさつ
 - ②プログラムの説明
- 2) 講演「心と体を健やかに」
中尾卓嗣（食と環境教育アドバイザー「うんこ博士」）
- 3) 休憩
- 4) グループ分けとアイスブレイク
 - (1) グランドルールの説明
 - (2) グループ分け
 - (3) グループ内アイスブレイク
- 5) ワークショップ
 - (1)ブレインストーミング
 - (2)KJ法
 - (3)ピラミッドランキング
 - (4)各グループの発表
 - (5)ビジネスモデルキャンバス
 - (6)各グループ発表
- 6) チェックアウト
 - (1)「食育に関連して、私に出来ること」
 - (2)グループ内で発表
- 7) エンディング
 - (1)中尾さんのコメント
 - (2)アンケート記入
- 8) 閉会挨拶

3. 実施結果

1) 講演

「心と体を健やかに」という演題で中尾卓嗣（食と環境教育アドバイザー「うんこ博士」）さんに90分講演をしていただいた。講演では、物事の見方や、経験の大切さなどを例としてあげながら、食育の大切さについて分かりやすくお話をされた。お話を聞いた後、以下のワークショップにつなげていった。

2) グループ分けとアイスブレイク

4人一組としてグループ分けを行った後、アイスブレイクを行いグループワークに入った。

3) ワークショップ

(1) まず、「あなたは食を介して何を伝え、何を遺していきますか？」という問いについて、ブレインストーミングを行った後、KJ法でグループ分けを行った。

(2) 分けられたグループに題目を付けた後、ピラミッドランキング方式を用いて大切だと思う順に順位付けを行った。その結果をグループ毎に発表してもらった。

(3) 続いて、各グループで一番の項目について、ビジネスモデルキャンパスという手法を用いて、「成果」、「主要活動」、「リソース」、「パートナー」について話し合いを行い、実施方法を検討した。結果をグループ毎に発表してもらった。

4) チェックアウト

「食育に関連して、私に出来ること」を各自で考えてもらい、グループ内で発表してもらった。最後に、中尾さんからコメントをいただき、フォーラムを終了した。

【ビジネスモデルキャンパス】

ビジネスモデルキャンパスの記入用紙を下記に示す。

テーマ:

成果 ・どんな成果が得られる？	主要活動 ・何をやる？	リソース ・何を使う？ ・何が必要？	パートナー ・誰と組む？ ・誰の助けが必要？

【第1グループ】

- 1) あなたは食を介して何を伝え、何を遺していきますか？
「人」がキーワードとして出されました。



- 2) ビジネスモデルキャンパス

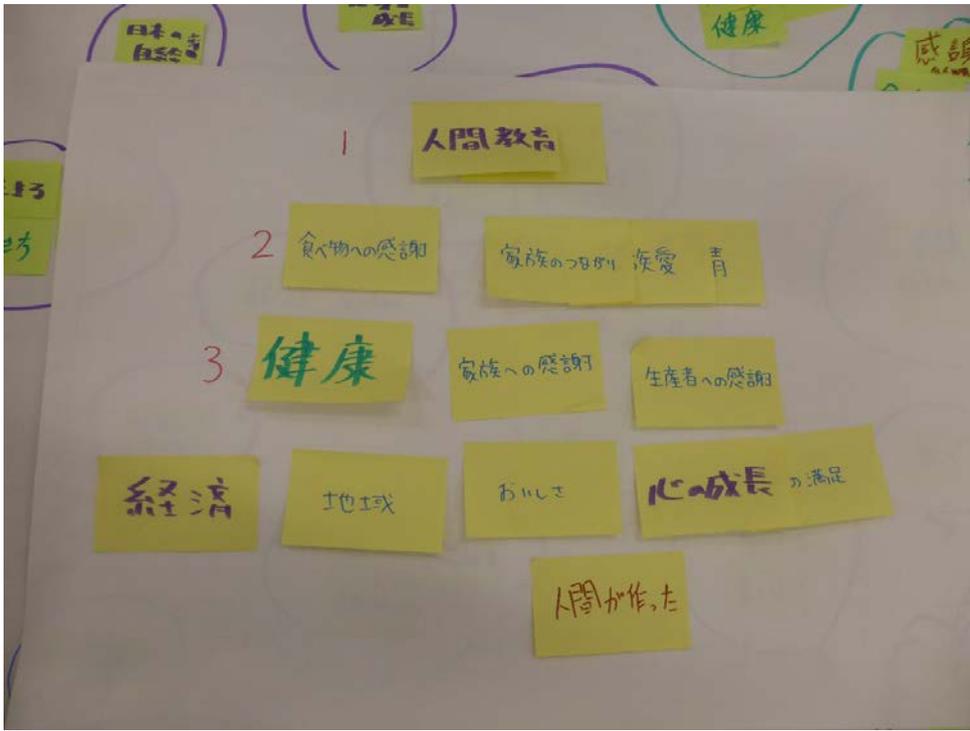
主要活動は「イベント開催」となり、成果として「きずな」と「地域おこし」が得られるという結果となりました。



【第2グループ】

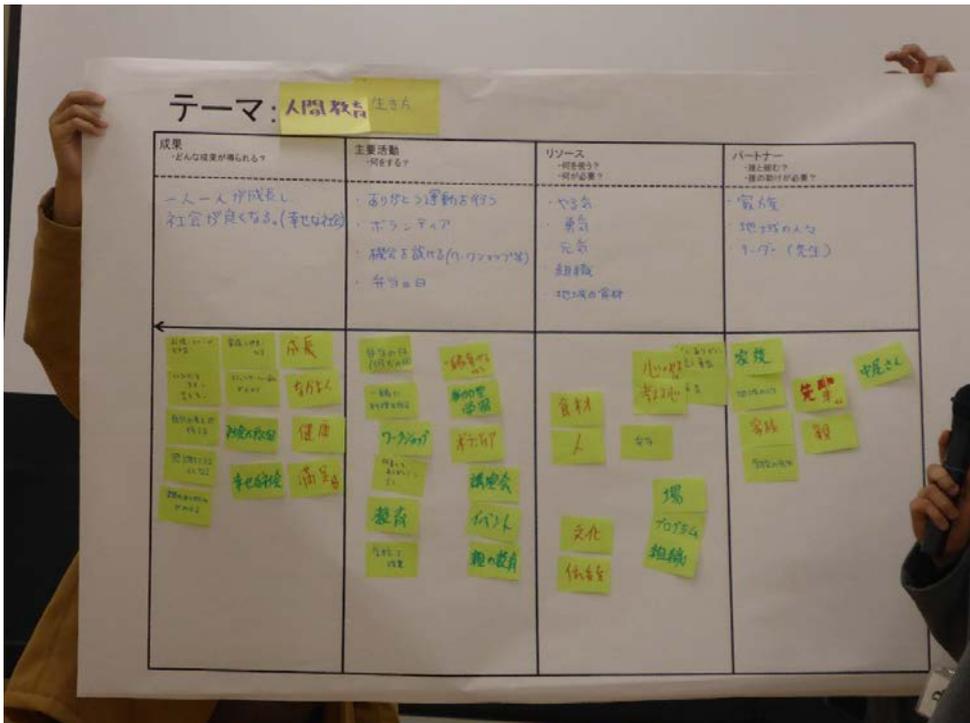
1) あなたは食を介して何を伝え、何を遺していきますか？

「人間教育」がキーワードとして出されました。



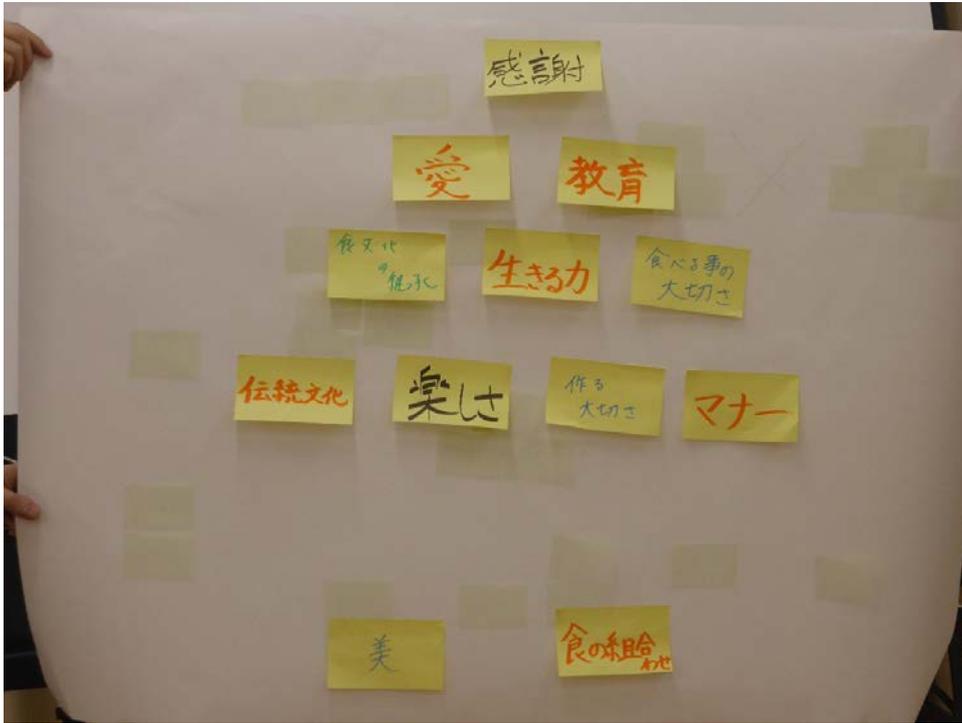
2) ビジネスモデルキャンパス

主要活動は「ありがとう運動」、「ボランティア」、「ワークショップ等の機会」、「弁当の日」となり、成果として「一人ひとりが成長して社会が良くなる（幸せな社会）」が得られるという結果となりました。



【第3グループ】

- 1) あなたは食を介して何を伝え、何を遺していきますか？
「感謝」がキーワードとして出されました。



- 2) ビジネスモデルキャンパス

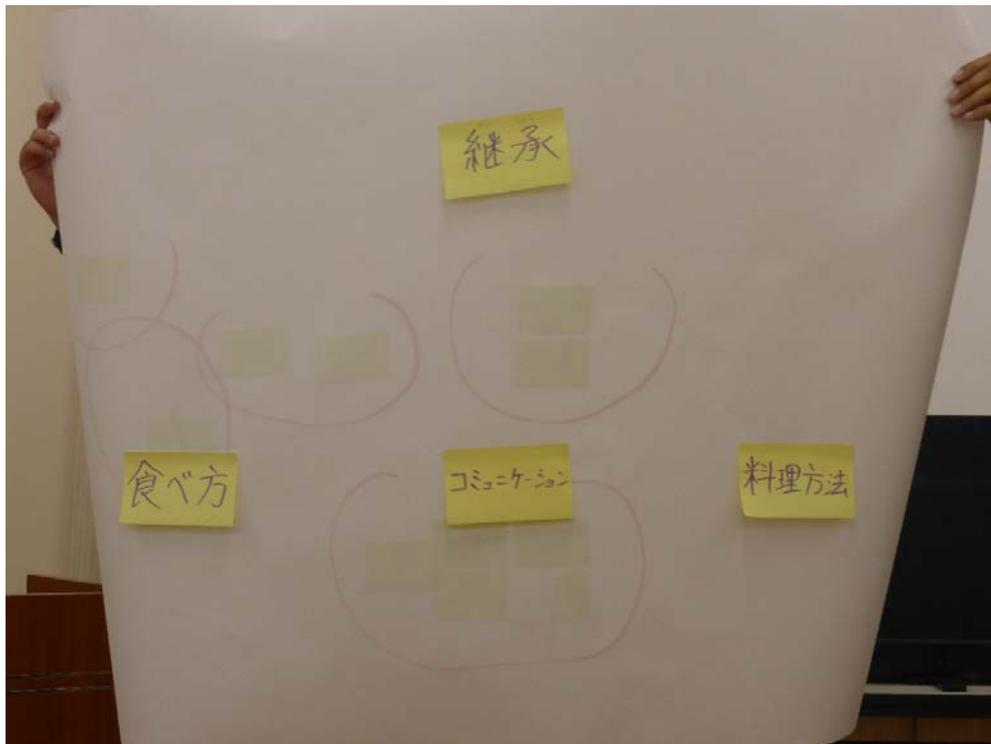
主要活動は「食べ物ができるまでの食体験を子ども達に学ばせる」となり、成果として「食べ残しが減り、食べ物を大切にする心が育まれる」が得られるという結果となりました。

テーマ: 感謝

成果 *どんな成果が得られる?	主要活動 *何をやる?	リソース *何をもらう? *何が必要?	パートナー *誰と組む? *誰の助けが必要?
食べ残しが減り、食べ物を大切に作る心が育まれる。	食べ物ができるまでの食体験を子供達に学ばせる。(身をもって)	時間(社協協力者(農家の人)) 計画企画 資金	農家の人 協会の 自治体の人達 親 先生 町全体
愛 感謝	知る 勉強 人の努力を理解 努力 行動	出会う機会 家族 時間 行動力	農家の人 家族 親 組合 友人 町

【第4グループ】

- 1) あなたは食を介して何を伝え、何を遺していきますか？
「継承」がキーワードとして出されました。



- 2) ビジネスモデルキャンパス

主要活動は「一緒に集まる機会を作る」となり、成果として「充実した暮らし」が得られるという結果となりました。

テーマ: 継承

成果 どんな成果が得られる?	主要活動 何をやる?	リソース 何をもらう? 何が必要?	パートナー 誰と協働? 誰の助けが必要?
充実した暮らし	一緒に集まる機会を作る 交流会、正月、お盆、祭り...	知恵 情報 情報交換 ネットワーク	身近な大切な人 経験豊富な人 「先輩」、学校で出会った 先輩の友人
物心 長寿 笑顔 健康	コミュニケーション 語る 料理教室	知識 情報 ネットワーク 情義	家族 友人 恋人 先輩 学校

4. アンケートのまとめ

1) 参加者

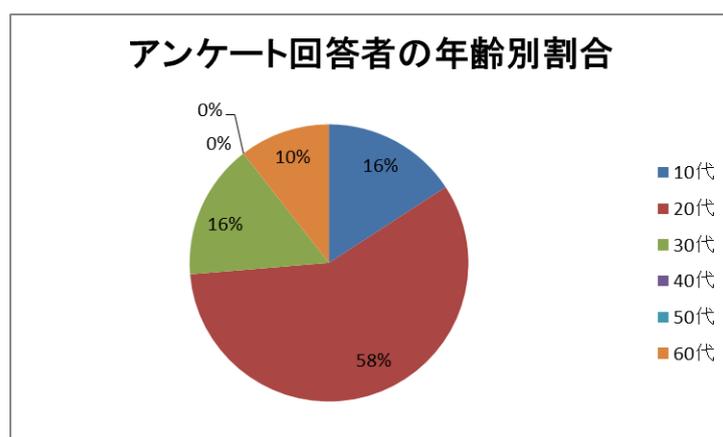
参加者は24名であった。

2) アンケート回答者の年齢・性別・居住地

アンケート回答者は19名であった。アンケートの結果を以下に示す。アンケート回答者の年齢は20代が中心であった。また、高梁市外在住の人の方が多かった。

年齢	人数
10代	3
20代	11
30代	3
40代	0
50代	0
60代	2

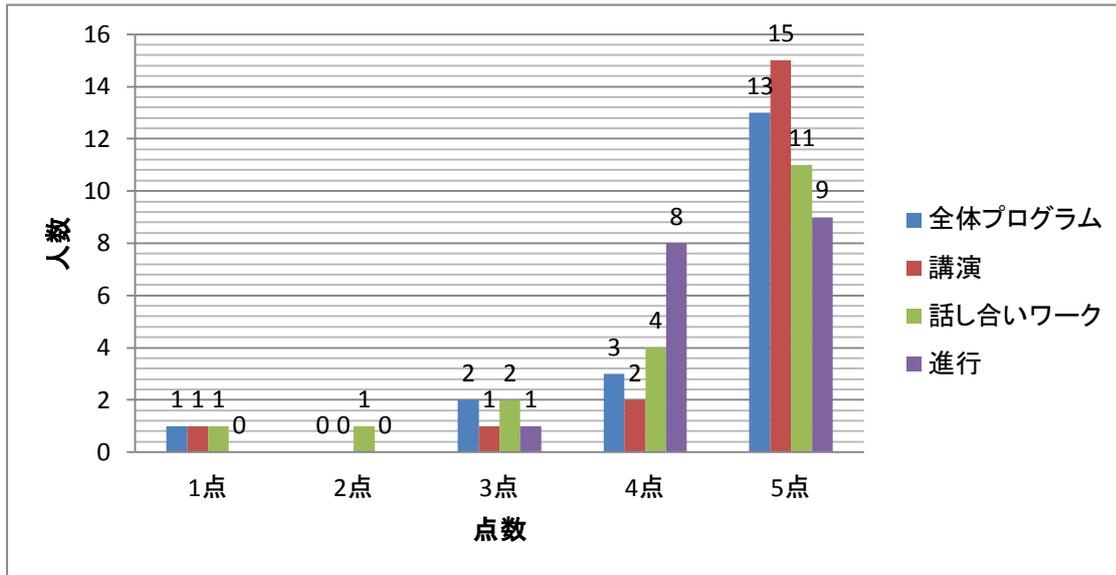
居住地	人数
高梁市内	11
高梁市外	8



3) フォーラムの評価

フォーラムの評価としては、講演については高い評価であったが、全体プログラムや話し合いワークの評価が低かった。話し合いワークの焦点が絞り切れていなかったことが原因であると思われる。

	1点	2点	3点	4点	5点
全体プログラム	1	0	2	3	13
講演	1	0	1	2	15
話し合いワーク	1	1	2	4	11
進行	0	0	1	8	9



4) アンケート記載事項のまとめ

①良かった点

- ・いつもと違うワークでおもしろかった。
- ・20cmのうなずきを実際にやったこと。
- ・参加型であったこと。
- ・日頃接する機会のない世代と話し合えたこと。
- ・雰囲気になごやかであったこと。
- ・中尾さんのキャラクター。
- ・テーマは良かった。
- ・新しい意識になりました。
- ・日本の食育文化に深い了解しました。
- ・他人の思いを知っていること。
- ・自分の考えを整理できること。
- ・食育に対する新しい知識を得ることができた。
- ・弁当の日いいね！
- ・準備完全、設備良い。
- ・お菓子と飲み物がある。
- ・講師の講演がいい。
- ・先生の講演内容。
- ・色々考えさせられた。
- ・感謝することの大切さが理解できた。
- ・とてもよい流れでした。
- ・食べることは生きること、生きるとは感謝することと改めて考えられた。
- ・グランドルールが良かった。
- ・何かを実現するにはまず自分からという空気があった様に思う。
- ・「食育」そのものを知らなかったので中尾さんのお話を通じて考えるきっかけが生まれ

ました。

- ・食に限らず家族をはじめとする人々とのふれあいが大切なんだと考えさせられました。
- ・講演が面白い。
- ・テーマは難しいが深めていくと面白い。
- ・食育について深く考えられた。
- ・中尾さんの話が分かりやすく講演後に他の人とも交流でき、良かった。
- ・感謝の気持ちを再確認。
- ・自分の成長につながった。
- ・自分の意見とは違った意見を聞いて納得。
- ・中尾さんの講演。
- ・ワークショップ。
- ・講演。
- ・時間配分。
- ・いい話を聞いた。
- ・ワークの内容が良かった。
- ・やってみたいと思う話があった。
- ・とてもためになる講演だった。
- ・たくさんの意見が聞いた。
- ・意見がうまくまとまったこと。
- ・よくできなかったけど発表をした点。
- ・話し合いの場があってよかった点。
- ・先生が見せてくれたプレゼンテーションを最後まで見て良かった。

②悪かった点・改善点

- ・できれば2・3年がどのグループにも分かれるようにしてほしい。
- ・市民の参加が少なかった。
- ・意見があまり出なかった。
- ・講師の話すスピードが速すぎ。
- ・話のテンポ（地域性にあったスピードにしてほしい）速すぎる。
- ・ポストイットに書き出す時、何を書けばいいのか分からなかったので質問内容を模造紙に書き出したり、前に貼ったりしたら分かりやすいと思います。
- ・休憩時間が少なく感じた。
- ・一般参加が少ないこと。FBで広報頑張っていたのに残念でした。
- ・井勝ゼミ以外の学生参加者がいてほしい。テーマ的に子発の学生に来てほしい。
- ・人数不足。学生ばかり。
- ・お菓子が少ない。
- ・机が余っていた。
- ・グランドルールが守れていない人がいた。
- ・自分は漢字が難しくてよくしゃべらなかつた点。

③感想

- ・楽しい時間でした。
- ・普段考えないことを話し合えて楽しかったです。
- ・今回のエデュカーレに来てよかったと感じることが出来た。
- ・面白おかしく話をしてくれたので内容が入ってきやすく感動できる内容もあったので充実していたと言えるだろう。
- ・改めて人の大切さや、何をすべきかについて理解できた。
- ・今度実家に帰った時、自分が作ったご飯を食べてもらいながら、ゆっくり話をして楽しみたい。
- ・自分の思いは他人のおかげでよく分かりました。本当にありがとうございました。
- ・考え方をまとめて目標になれる気を感じました。とてもすばらしいと思います。
- ・とにかく講演会の内容が良かった。
- ・こんなにも食を通じて色々なことが伝えられることに驚いた。
- ・大きな感謝をしていきたい。
- ・自分自身が持っていた食育の概念を見直す機会となりました。
- ・話を聞いて少し考え方が変わった。それこそ初めの見方を変えただけかもしれないけど。
- ・中尾さん、本日は貴重なお話をしてくださりありがとうございました。
- ・実行委員の皆さんお疲れ様でした。
- ・初めて高梁に来ました。
- ・中尾さんのお話は相変わらずあたたかく、心が温かくなった。その効果からか、あたたかいグループワークになったと思う。
- ・このような会に参加させて頂きありがとうございました。
- ・今回の講演を聞いて自分が思っている食文化はただ食べるだけのことだと思っていたけど食文化の中にもたくさんの繋がりがあるんだなと実感することが出来ました。
- ・良い講演でした。
- ・今日来てよかった。
- ・「食」に関して色々なことが分かり、人と人との関係はもっと深くなった。
- ・中尾さんの話はとても考えさせられ興味深いものだった。
- ・たくさんの意見も聞くことができとても有意義な時間だった。
- ・お世話になりありがとうございました。
- ・うんこの話が炸裂するのかと少々恐れていましたが上品かつ意義深い講演でした。
- ・若い皆さんの真剣な取り組み方に希望を持ちました。
- ・自分自身が持っていた食育の概念を見直す機会となりました。
- ・本日は事実ではなく「心」の教育が焦点になっていたように思いました。

5. おわりに

第10回エデュカーレ in たかはしは、「食育」について題材として開催しました。

食べたい物を普通に食べていられるこの環境がどれだけ贅沢なことか、そしてみんなが好きなお菓子やジュースはどれだけ身体にも悪いかを知り、中尾さんの関西弁を交えた講演で楽しく学ぶことができました。「食」に関連して、私たちは何を伝え、何を残し、私たちにできることは何かを話し合いました。まずは小さなことでも行動に移し始めてみるのが大事だと思います。

これからも、よりよい意見交換の場を作れるようにしていきたいと思っておりますのでエデュカーレ in たかはしをよろしく申し上げます。

実行委員長	行森 俊紀
副実行委員長	的場 美希
	栢原 かなえ

6. 付録

1) 配付資料

心の栄養、体の栄養

中尾 卓嗣
沖縄大学地域研究所特別研究員

本年度より地域研究所の仲間に加えて頂くことになりました、中尾卓嗣と申します。

私は勤務する国の機関の業務として、また公務外のボランティア活動として「食育」に携わっております。この度は投稿の機会をお与え下さりましてありがとうございます。自己紹介を兼ねて私の活動と本学における研究のテーマを記述させていただきます。

◆親が子どもに残せるもの

私は少年サッカーの指導もしています。スパイクのかかとで踏んでいる子を見つけると「傷むから踏むな!」と注意します。そうすると踏まなくなります。しかし、これは物を大切に思う気持ちの醸成からの行動変革ではなく、「コーチに叱られるから」です。

続いて「このスパイクは誰に買ってもらった?」と問いかけると、「お母さん」「では、そのお金はどこにあった?」「お父さんが会社に行って」「会社に行ったらお金が落ちているの?」「違います。〇〇して働いたから…」つまり、「物を大切にしろ」と言う前に、その物が目の前に存在するために関わった多くの人の存在を知ることが重要です。そこから、たくさんの人の知恵や思い、手間や苦労といったものを感じとることにつながり、自ずと物を大切にしようという気持ちが芽生えてくるのです。

私の父は小学4年生の時に病死しました。母は束子を巻く内職で私を育てました。1つ製作しても2円程度の仕事ですから、収入を得るためには時間で解決するしかありません。ですから、今で言う教育や睡眠に十分な時間はとれませんでした。が、女手一つで私を育てるために朝星夜星で寝食忘れて働く母親の後ろ姿は最大の教育であったと懐古します。身の周りの物は、全て母が汗水流して働いてくれた賜物だということを、子どもながらに実感していました。

昔は親の職場が家や近所であることが多く、子どもたちは働く姿を身近に見ることができました。しかし、サラリーマン家庭が多くなった今日、親の労働を目にする機会が極端に減り、子どもたちは目の前にある物と、親の汗水がつながりにくいのです。唯一身近な労働であり、子が親の愛情を感じる機会として存在すべき家事も様変わりしています。

だからこそ、生きていくために働く親の後ろ姿を見せることが必要なのです。



◆「いただきます」は誰に言う？

小学校や幼稚園・保育園へ出張授業で、私はよく子どもたちにこう問いかけます。

「お家でごはんを食べる前に言う『いただきます』は、いったい誰に言っているの？」

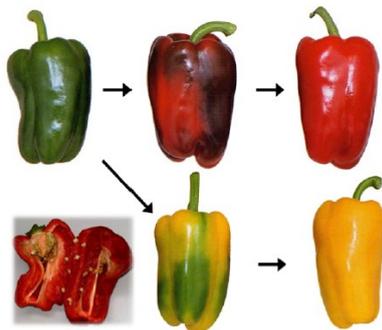
農家や食べ物へといった意見の中にはありますが、こと家族に関する答えとしては殆どが「お母さん」です。なぜかと尋ねると、「作ってくれたから」と答えます。子どもの意識の中では、食べるために働いてくれたのはお母さんで、お父さんの介在は分かりにくい。母さんが「お父さんの仕事のおかげだね」と一言添えれば、その「いただきます」はお父さんへの気持ちとしてつながっていきます。

私は教材に子どもが嫌いな野菜として上位ランクされるピーマンをよく使います。

アンケート結果を示して、ピーマンが嫌いな子が多いことを確認し、「どうして？」と尋ねると「苦い・臭い」との回答。手にしたピーマンを割って見せ、中にある白いツブについて「これ何？」と尋ねると「種（たね）！」と直ぐに回答がある。「では、この種をまいたらどうなる？」と尋ねると「ピーマンができる！」と返ってくる。「しかし、この種をまいてもピーマンはできない、なぜだ？」と尋ねると、子どもらは首をかしげます。「答えはこれだ」と成熟したピーマンを見せると、直ぐに「赤ピーマン」と声があがる。でも、これは赤ピーマンという種類ではない旨を話すと、パプリカ、ハバネロなどといった名前が飛び交います（机上の知識は豊かだ）。

「この青いピーマンはまだ子ども。長生きするとこんなに赤くなったり黄色くなり、白い種が突って茶色になる。その種を植えたらピーマンができる。ピーマンはまだまだ成長できたのに、ブチッと切られてみんなの給食に出る。そうしたらみんなから『苦い！臭い！』と嫌われ捨てられる。ピーマンはどんな気持ちだろう？」

この話をすると、殆どの子どもたちがピーマンを食べようとしています。それをすかさず褒め「よく頑張ったね。緑のピーマンにはここまで成長する元気がいっぱい詰まってる。みんなはその元気をもらって、健康になれるんだよ。ありがたいな」「お米も野菜もお肉もみんな生き物。私たちはその命をもらって生きている。」と話します。



◆覚えるより感じとる学習

子どもたちは人を思いやったり、自然や他の生き物を思いやる気持ちに満ちあふれています。その子どもたちの心に何を映すか。大人が意識して取り組まなくてはなりません。

お母さんに対しての「いただきます」を食べ物の命にまでつなげたい。しかし、お母さんからいきなり命につなげるのではなく、お父さん、商店、市場、農家、漁師さんなど、あらゆる人の心が、目の前の食べ物にこもっているということ、そのつながりの先に「命」を感じて欲しい。食べることができるのは、本当にありがたく幸せなことだということを感じる機会を創成したいですね。



子どもたちには、「教える」より「五感を刺激する中から感じとり気付くこと」が必要です。農林漁業体験も気付きの良い機会となります。作物の成育に直接関わることで、食べ物はすべて命あるものという感覚に誘います。土に触れ、モノ言わぬ植物や家畜を相手に彼らの意をくみ取り対処することは、人の心をくみ取り、人のために働く力を培います。

◆愛されていると感じる人から言われて躰は身に付く

子どもたちに家事を分担させ責任を持たせることが必要です。「食べ残すな」と口で道徳論を教えるより、普段親が何気なくやっている家事がどれだけ大変であるかを知り、一生懸命に作った料理を残された時の気持ちも理解します。

使える時間やお金は家庭によって違います。かけた金額や時間の多少ではありません。それぞれの家庭のできる範囲で、子どもたちが感謝の対象を感じ、物の大切さについて考える機会を少しでも多くもっていただきたい。

しかしながら、教育力の低下した家庭において保護者にどれだけ訴えても行動変革につながりません。訴える場に居合わせない場合も多いのです。親ができないのであれば、地域や学校でどう子どもを育てていくのか…。その仕組み作りが急がれています。その素晴らしい仕組みとして、「弁当の日」があります。

参考ウェブサイト：<http://www.bentounohi.com/>



離島だからこそ“弁当の日”

ボランティア食と環境教育アドバイザー
香川大学医学部 非常勤講師

中尾 卓嗣

これまで食と環境教育の実践の中で出会った八重山列島の人、文化、食を取り巻く環境について2島を例に紹介し、なぜ離島で“弁当の日”なのかについて記述することにより、離島のみならず日本の食を考察する際の一助になれば幸いと考える。

八重山に足繁く通うきっかけ となった小浜島

八重山列島とは、石垣島、竹富島、小浜島、黒島、新城島（上地島、下地島）、西表島、由布島、鳩間島、波照間島、西に離れた与那国島の合計10の有人島と周辺の無人島からなる島々を指し、与那国島が人の住む日本の最西端、波照間島が最南端に位置する。

2004年から08年にかけて、原油価格が暴騰し世間を騒がしたことは記憶に新しい。

生活物資のほとんどを島外からの輸送に頼る離島では、原油価格が生活に直結する。小浜島も例に漏れず、唯一存在する小浜小中学校では給食費の値上げや減量を含めた検討に迫られた。これに対し、花城正美校長（当時）は島民の協力を得て学校農園を開設し、子どもらが作る農作物を学校給食に供することにより回避したとの情報を得て09年9月、フィールドリサーチに出向いた。

「日本各地で伝統芸能の伝承を目的とした取り組みがされているが、大切なものが

置き去りにされていないか？ 祭りやそれに伴う舞の多くは、生きるために不可欠な収穫への切実な願い（祈り）や感謝を表している。そもそもその作物を作ることを体験せずして、その作物への思いを舞い奏でることができるだろうか。文化や芸能は単に技術を教えれば伝承できるものではない。農業体験は伝統芸能に大切な心を込める意味もある」。花城校長の熱く語る姿が印象的だった。

一方、生活に目を向けると、離島においても日頃から子や孫に農業や漁業を手伝わせる機会は減っており（保護者の意識も低下）、学校における原体験は、命のつながり、人のつながりを知り感謝の心を醸成するために必要な状況となっている。

離島に勤務する教職員のほとんどは島外出身者である。島外者である教師と島民の絆が時代の流れとともに弱まっているように感じる現場も目にした（離島に限ったことではないが）。奄美や八重山などの離島ではナイチャー（内地の人）とかヤマトンチュウ（大和人）といった表現をよく耳にする。友好的に使う場合もあるが時には隔たりの表現となる。祭りは練習を含めて学校と地域とのコミュニケーションの場でもあり、受け入れ側の島人と、島に入る教職員心の絆を深める場でもある。教師が永年勤務できない現状において、子どもたちにとって望ましい取り組みは伝統芸能と同



離島だからこそ“弁当の日”

じく教師間の引き継ぎだけに頼るのではなく、保護者が認識し継承していく必要がある。

離島の食を総括して

沖縄の食を語る上で欠くことができないのが、離島や本島の農山村で目にする「共同売店」だ。全住民の出資によって運営される商店で、いわば生協のようなもの。20世紀初頭、沖縄本島北部の集落に設立されたのがその始まりとされる。貧しい集落で複数の商店が競合すると共倒れし、結果的に住民の生活が成り立たなくなるというのが最大の理由だったようだ。

これまで30を超える離島の学校に出向いているが、離島と言ってもアクセス環境(空港の有無)、教育環境(高校の有無)、医療環境(総合病院の有無)、流通環境(コンビニやスーパーの有無)はそれぞれ異なり、ひとつくりにしてはできない。しかし、子どもたちが口にするものは、間食を例にとってみても伝統は影をひそめ、スナック菓子や清涼飲料水が氾濫していることは否めない。意識して食事を与えている保護者も存在するが、総じて普段の食生活においては伝統が崩れて島外と大きな違いがなく、清涼飲料水の多飲など、むしろ島外をしのぐ事例を目にすることもある。

かつて沖縄県は男女とも長寿県として知られていたが、男性の平均寿命は日本の平均をも下回る現状において、学校における食の学びや原体験、地域や家庭に向けた発信が強く求められている。加えて、ネグレクトや虐待といった危惧すべき親子関係も存在する。離島は離婚率が高いという統計もある。あくまでも私見だが、親子関係や

食の乱れについては、いわゆる「便利な離島」ほど、課題が多いように思う。

離島だからこそ

何はともあれ、多くの離島に共通するのは、高校がないから中学卒業と同時に親元を離れなければならないこと。裏を返せば卒業までに全員自立しなければならないし、させなければならないのだ。自立に必要なものは何なのか、そのためには何をすべきなのか。その期限が他の地域よりも早く訪れるのが離島に住む親子の宿命なのである。

だが、共同意識が高い離島であるからこそ、集団での取り組みは効果を生みやすい。その意味において、自立に向けた子どもの気付き、自己肯定感と望ましい親子関係の形成のため、“弁当の日”は素晴らしい取り組みであると考えている。

「最南端の“弁当の日”」

人口537人の波照間島は日本最南端に位置する。航空機の定期便がなくなり、通常の渡航手段はフェリーか高速艇となる。海の色は筆舌し尽くせないほどの美しさだが、波の影響を受けやすく、島に渡れても予定通りに島を離れられないことも多々ある。

小中学校は教育理念「足元を見つめ、夢を抱き、世界へ羽ばたけ」、校訓「知徳、誠心、師弟和楽」、教育指針「島を愛し、共生、じりつできるウタマ^{*}」を掲げて、目的意識をもち将来に夢を託す(島を愛す

^{*}島のことばで「子ども」を表す。



波照間小中学校で実施された“弁当の日”

る)ウタマを育てようと日々努めている。

夕刻、学校方面から聞こえる声につられて訪ねてみると、芝生のグラウンドで舞踏の稽古が行われていた。運動会で披露するために住民が中学生に教えているとのこと。演舞の内容について尋ねると、悪徳役人に農民が結集して立ち向かうものだと説明をいただいた。地域と学校の結びつきを強く感じる島の1つだ。

13年9月10日夜に保護者と地域住民に「食で育む心と体」～心の栄養・体の栄養～というテーマで講演し、翌11日には小学低学年に「元気なウンコで体も元気」、高学年に「食べ物のヒミツたんけん」、中学生に「何を食べどう生きるか」という

テーマで授業を行った。高学年には、食肉処理場に連れられた牛のみいちゃんと子どもを描いた絵本「いのちをいただく」のDVD観賞も行ったが、熱心に見入っていた。

波照間小中学校では13年2月の第0回を経て、11月15日に第1回“弁当の日”が実施された。翌年2月には第2回も実施され、日本最南端の島において家庭と学校とが連携する取り組みが始まった。

育ての取り組みが引き継がれていくことを喜びとともに報告し、“弁当の日”で幸せな人生が送れる親子がますます増えることを切に願い、拙稿を終わらせたい。

2) ポスター・チラシ

第10回 エデュカーレ in たかはし

「食でつなげる人・未来」

～自然、文化、環境～

様々な経験を通じて、「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てるものとして食育の推進が求められ、単なる食生活の改善にとどまらず、食に関する感謝の念と理解を深めることや、伝統のある優れた食文化の継承、地域の特性を活かした食生活に配慮すること等が求められています。

本フォーラムでは、食育の必要性について参加者が理解するとともに、私たちは子どもたちに何を伝えなければならないのか、参加者同士で意見交換をします。

日 時:平成28年12月17日(土)13時00分～17時00分
(12時30分受け付け開始)

会 場:高梁まち・ひと・くらし市民交流センター(ホルカ2階)
〒716-0045 岡山県高梁市ホルカ通り1084-1 (駅から徒歩10分)

内 容

1、講演(13:00～14:30)

「心と体を健やかに」

中尾卓嗣(食と環境教育アドバイザー「うんこ博士」)

2、会場参加型討論会(14:45～17:00)

「あなたは食を介して何を伝え、何を遺していきますか？」

～貴方ができること、地域でできること～



参加費無料・申し込み不要(直接おいで下さい)

※途中入退場も可能です

※講演のみの参加でも構いません

主 催:エデュカーレ in たかはし実行委員会
協 力:吉備国際大学社会科学部 井勝研究室

問い合わせ先

〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町

吉備国際大学 社会科学部 経営社会学科

井勝(いかつ)研究室

TEL/FAX:0866-22-9223

E-mail:ikatsu@kiui.ac.jp

3) アンケート用紙

第10回 エデュカーレ in たかはし

アンケート

年 齢： 10代 ・ 20代 ・ 30代 ・ 40代 ・ 50代 ・ 60代 ・ 70代 ・ 80以上

性 別： 男性 ・ 女性

居住地： 高梁市内 ・ 高梁市外

全体プログラム： 悪かった 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 良かった

講 演： 悪かった 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 良かった

話し合いワーク： 悪かった 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 良かった

進 行： 悪かった 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 良かった

本日のフォーラムの良かった点をご記入下さい

1. _____

2. _____

3. _____

本日のフォーラムの悪かった点、改善点を教えて下さい。

1. _____

2. _____

3. _____

感想をご記入下さい。

ありがとうございました

4) 写真

①受付風景。会場はポルカの市民交流コーナーです。



②実行委員長挨拶（行森）／総合ファシリテーター（栢原）



③中尾さんの講演



④中尾産の講演の様子



⑤アイスブレイク



⑥ブレインストーミング&KJ法



⑦ピラミッドランキング結果の発表



⑧ビジネスモデルキャンバスを考えています



⑧ビジネスモデルキャンバスの発表



⑨おわりの挨拶（副実行委員長：的場）



⑩参加者の記念写真



実行委員名簿

◇実行委員長

行森 俊紀 (社会科学部 経営社会学科 3年)

◇副実行委員長

的場 美希 (社会科学部 経営社会学科 3年)

栢原 かなえ (社会科学部 経営社会学科 2年)

◇実行委員

大川 朱理 (社会科学部 経営社会学科 3年)

中谷 雅尚 (社会科学部 経営社会学科 3年)

枝光 広斗 (社会科学部 経営社会学科 3年)

中村 洸太 (社会科学部 経営社会学科 2年)

井上 健太郎 (社会科学部 経営社会学科 2年)

連絡先

〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町 8

吉備国際大学 社会科学部 経営社会学科

井勝 (いかつ) 研究室

TEL/FAX:0866-22-9223

E-mail:ikatsu@kiui.ac.jp